連載⑦⑧

# 内海善雄（ITU元事務総局長）のやぶ睨み「ネット社会」論

# 舛添前都知事のせこい公私混同

## 日本人は潔癖すぎないか？

舛添要一・前都知事の公私混同、そして、国民感情から遊離した上から目線の弁明は、腹立たしく、また、醜い。このような人物が都知事かと思うと情けなくなるが、自らの保身のために知事を守ろうとした都議会自民党は、もっと醜い。

しかし、中国では「なぜ日本人はこんなに怒っているのだろう。これなら中国ならば、『清官（清い役人）』だ」とか、家族同伴の〝公務旅行〟だったことについて、「愛人じゃないなんて驚きだ」などのブログが出回っているという。

「ｓｅｋｏｉ」と書かれた「ニューヨーク・タイムズ」の記事も、原文をよく読んでみると、都知事は、少額のつまらないことで問題にされているというレポートである。どうも今回の騒動で見せたマスコミや庶民の清潔さは、世界的に見ると特異なものかもしれない。

## 辟易した国際機関職員の要求

多数の国の人たちが働く国際機関で筆者は、彼らの「せこ」さ加減に辟易した。彼らの理不尽な要求を拒否したものだから、杓子定規で石頭の事務総局長だと職員からの評判を落とした苦い経験がある。以下、若干例示してみよう。

①イラン出身の管理部長が得意げに持ってきたのは、ＩＴＵの高速印刷機を職員の印刷屋アルバイトのために使用を許すと言う通達案であった。「公私混同でダメだ」と拒否すると、「職員の結婚式のために食堂を利用させているが、これと同じではないか」と反論して納得しない。空いている印刷機を活用して、職員に儲けさせることは、まるで善政のように思っているのである。

②カナダ出身の幹部職員の帰任にあたって国連共通ルールの引っ越し費用の増額を特別に認めよと要求された。理由は、赴任の際に事務局の誤りで多額の運送費が払われたため、たくさんの家財道具を持参したからとのこと。日本なら、逆に赴任の際の過払いの返却を請求される立場であろう。

③ＩＴＵには、地域に密着するため少人数の職員が駐在する地域事務所がある。バンコック事務所のインド出身の職員の妻が癌になり、自国で療養させるため、インドからテレワークで勤務できるよう特別許可を与えよと要求された。許すとバンコック事務所の存在意義がなくなる。許さなかった筆者は薄情だと罵られた。

④イラン出身の職員が定年退職するにあたって、自分のパスポートの誕生日は誤りなので、まだ定年でないと主張した。しかし、主張する誕生日を認めると、大学卒の学歴が計算に合わないと反論したら引き下がった。

⑤後任のマリ出身の事務総局長は、セキュリティ対策と称して自分のために特別な宿舎手当を理事会に要求した。テロが横行している時期で、理事会も拒否しなかったため、赤字の財政難で苦しんでいる最中、自分だけ実質的な給与増額を行った。

等々、いくらでも事例を列挙できる。

これらは、自己の利益のためルールに特例を設けることを要求したものだが、日本人なら恥ずかしくてとてもできないことだろう。しかし、彼らはダメ元で平気で要求するのである。そして、その要求を、明日は我が身と思い、支持する人たちが多数いるのである。

## まかり通る「せこい」行動

特例の要求は、彼らの行動や考え方が白日の下に晒される。一方、舛添前知事の例のように、既存のルールの中で密かに自己の利益を図ることは、ほとんどがオープンにならないから、その実態を知ることは困難である。しかし、以下のようなオープンになったケースから容易に日常茶飯事に行われていることが推察される。

⑥格安航空券で出張していながら、正規運賃の支払いを受けた米国出身職員がいた。国際機関を渡り歩いたオランダ出身の人事部長は、「国際機関の職員に横行している違法行為なので、発見した以上、厳罰にしなければならない」と主張した。定額の出張手当が支給される日本の公務員の出張旅費規定に慣れた筆者には、職員の才覚で浮いたものは、その者が収得してもよさそうに思えたが、国連は、厳格な実費払いの旅費制度である。

⑦その人事部長が定年退職すると、年金に税金が免除される第三国を終（つい）の住所として届けてきた。年金支給の担当者は、「連絡がつかないので、実際には住んでいない架空の住所に違いない」と、さも普通のことのように平気な顔で話す。

このような例を見ると、日本人が「せこい」と思うような事象は世界中どこにでもあり、至極当たり前のように思える。しかし、筆者はとても許すことができなかった。

「自分の腹が痛むわけでもないのになぜ認めてやらないのか。評判を落とし、損をするだけだ」と多数の者がアドバイスしてくれた。筆者の判断が誤っていると思ったからであろう。しかし、このようなことを許すと組織のタガが外れてしまう。そんな理屈よりも、生理的な嫌悪感をもよおした。これが、おそらく一般的な日本人の姿だと思う。

## 忘れてはならない求められる資質

都には多くの懸案事項がある。地震対策、オリンピック招致、築地移転、待機児童、都市難民等、手をこまねいておけない大問題が山積みである。単純に経済的に見ても兆の単位で影響がある問題である。冷静に考えると、たかだか数百万円レベルの知事の不当利得に、マスコミをはじめ都民が朝から晩まで大騒ぎをして目くじらを立てる価値があったかどうかは怪しい。上記の喫緊の課題に皆が同等のエネルギーをかければ、東京も格段に向上することが期待できたと思う。ブログを書いた中国人や「ニューヨーク・タイムズ」の記者には、今回の現象が不思議だったのかもしれない。

不当利得の何千倍も経費をかけて次の知事が選ばれる。多くの都民は、今度こそ不祥事を起さない候補者を選びたいと思うだろう。もちろん人格高潔、清貧なリーダーが必要だし、それを求める住民の健全な精神は日本人として誇りである。しかし、東京が抱えている懸案問題の解決能力が最も都知事に求められる資質であることを、心しておかなければならないと思う。

舛添騒動は考えることもたくさんある

**内海善雄**（うつみ よしお）

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省（現総務省）入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合（ＩＴＵ）事務総局長就任。現在は一般財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。ＩＥＥＥ名誉会員。